

東京 陵 水

賀 正

平成19年 元旦
陵水会東京支部役員一同

紙上座談会

激変する大学の諸環境に向けて 陵水会と東京支部のこれからを語る

平成十九年は、国立大学法人にも公立私立大学にとっても、その経営環境は一段と厳しくなると考えられる。母校への陵水会支援活動の重要性は益々大きくなって、そのためには会自らの体力の増強、活性化が強く望まれるところである。

そこで、新春にあたり東京支部幹部の皆さんによる紙上座談会を開催して母校と陵水会のこれからを展望して頂いた。

参加者は、宇治原嘉政東京支部長、西坂徹雄同副支部長、守谷貞夫同幹事長、「東京陵水」編集部（鈴木重成・林史欣）

——国立大学法人化がスタートして間もなく二年を経過するわけですが、この間に母校がどのようにに改変されたか、学長始め母校のスタッフと接してきて、



目次

- | | |
|------|-------------|
| 1 面 | 紙上座談会 |
| 4 面 | 役員幹事会・こんにちハ |
| 9 面 | 随筆「再会」 |
| 10 面 | 紀行文 |
| 12 面 | 良本氏追悼・有田会開催 |
| 13 面 | 囲碁会便り・ゴルフ談義 |
| 14 面 | 彦根コンフィデンシャル |
| 15 面 | 年会費納入者一覧 |
| 16 面 | 広告 |

クシヨンプランの大幅未達のところは切り捨て、実効の出ているところは更に負荷を与え、より成長させるような明確な方針が必要です。厳しい緊張感なくしては改革は成功しません。

——教科カリキュラムに母校の独自性がどんな形で盛られているのでしょうか。

宇治原：現在母校は六学科あり社会経済の多様化に即してカリキュラムの充実が図られており、更に〇四年四月、経済学部の内容としてグローバルスペシャリストの養成が上げられ、高商よりの伝統を発展させていこうという努力が払われています。

守谷：六学科十七講座は他の国立大学法人の経済学部を凌ぐ体制にあります。大学院経済学研究所では、野村総研との産学連携なども開始され期待されます。また彦根市に協力して地域振興講座が開設され意義深いものと思います。これからは地域ボランティア、社会奉仕活動の必要

性、重要性が強調されてくるでしょう。これらの活動に対し内容評価のうえ、単位取得させる方法も検討すべきではないでしょうか。

——とかく苦しいといわれている財政事情の実態はどのようなのですか。

守谷：このところ、企業経営はあらゆる面でコストカットを迫られてきました。国立大学のみが埒外たりえませんか。財政悪化は自主努力で克服すべきです。

——こういう点で滋賀銀行出身の同期、力石伸夫君のような大学外の役員に大いに期待します。同君は地獄を見た男ですから。陵水会としても、限度もあります。が、可能な限り協力するのは当たり前のことです。

宇治原：文科省の方針で大学法人の予算は厳しくなりこそすれ緩くなることはないといわれています。

——設備施設の充足度や整備状況は法人化前に比べてどんな印象ですか。

守谷：設備施設に対する予算の投入は、法人化前かなりの額が駆け込みかと思えるほどになりました。そこで当然と言えらるでしょう、ここ数年は相当に減ってきているようです。

でも皆無ではありません。業績を上げて文科省に必要性を認めさせ、設備施設予算を獲得すべきでしょう。

宇治原：魅力あるキャンパスづくりは必須だと思います。しかし施設の充実は資金面との相談です。昨年度は学部への申請に基づき、学習教育支援室の立ち上げに、陵水学術後援基金より千四百万円の補助を行いました。

——入学試験の出願状況や卒業生の就職の実績等から、母校は社会的にどのように評価されているのでしょうか。

宇治原：学部の説明によると受験生の応募状況、また卒業生の就職状況も良好と聞いています。母校OBが活躍していることが、それなりに評価されているのだと思います。

守谷：このところ志願者数が連続して増えていて、大学当局の努力に敬意を表します。○六年九月二十三日付の「ダイヤモンド」誌の集計で、出世できる大学のランキングで母校が九位になったのは特筆すべきことでした。二十年、三十年前の滋賀大教育の成果であることは疑う余地無しです。

西坂：十八年度の入試では、志願者数が大幅に増えて、国公立

大学では増加率で全国六位とのこと。一方の出口に当る就職率も九十パーセントを超え、ほぼ希望者の全員が就職しているそうです。就職先もトヨタ系各社、都市銀行、電通など就職難関企業からベンチャー企業、県内の地元企業まで多岐にわたっています。卒業生は決して派手ではないが、しっかりした仕事をし、頼りになる社員として評価されていることが、幅広い就職先につながっているように



思います。でも最近の卒業生で東京に就職するのが減っているのは東京支部としては少々寂しいところです。

——ひとつの話題に上っていた医科大学、県立大学、京都学芸大学、工芸繊維大学等との再編

成と統合の動きは、その後どのように感じておられますか。また新しいニュースはありますか。

宇治原：再編、統合の話は、白紙になったと聞いています。肝心なことは、大学が更に強く

立派になることであって、大きなことはその後で考えればよいことだと思います。学部は今先ず自らのところのハードとソフトを強化すべきと考えておられ、当分そのスタンスでよいのではないかと考えます。

守谷：宇治原さんも言われたように、大学が大きければよいとの議論には賛成いたしかねます。必要なのは、その内容、実力じやありませんか。MIT、一橋、東工大等の例があります。神戸大学は総合大学になったが、地盤沈下していませんか。

西坂：お二人とはやや違います。大学の安定的経営規模を確保するためには、京滋の国公立大学の統合は進めるべきと考えます。経済学部のみを単科大学

構想は現実的でない以上、先ず規模のメリットにより経営を安定させ、その中で特色ある経済学部を作ったらどうでしょう。大学の財政や競争は今後益々厳

しくなる現実を直視すべきだと思います。

——ジュニア懇話会、OB担当講座（リーダーシップ論など）の今後の展開と学生に与える効果など、お考えをお聞かせください。

西坂：リーダーシップ論の講義

を引き受けましたが、自分もエキサイトし、学生たちにも印象に残るものになったと思います。ただ、百人程度の受講生に対し百五十枚近いレポートが提出されたのは驚きでした。レポートの中身からして、学生の二極分化が出てくる気がしました。

先輩が母校で講座を持つことは非常に有意義です。特に守谷社長のように現役の経営者として頑張っておられ、また外的環境である世界と日本の経済に精通しておられる方が、中小企業経営論をやって頂けば、学部学生のみならず、大学院生、若い教官達にもよい刺激になると思います。是非実現してください。

守谷：OB担当講座の講義録を読みました。みなさん大変優れた内容です。若い学生がその価値を認識するように大学側でもっとそれをフォローして欲しい。大学六回の小田茂さんのお話を学生時代に聞いておれば、私のサラリーマン生活は全然違ったものになっていたでしょうね。

宇治原：卒業生の活躍が学生の啓発にプラスすることは大いにあります。これからこの種の企画は大いに発展させてゆきたいと考えています。

——東京支部の課題にあげられている問題の、今後の検討と実践についてお考えをお聞かせください。先ずは、支部会費と本部会費の口座引去りの進み具合ですが。

宇治原：まだ口座引落とし先の数が六十前後であります。今後とも継続して口座引落としの依頼を繰り返してお願ひしてゆきたいと思っています。

守谷：宇治原支部長の強力なリーダーシップのおかげで口座引落としの申し出が徐々に増えてきています。事務当局としては大変助かっており、一人でも多く手続きを願います。

——支部組織の強化にあたり、年次幹事の編成を整備するにはどうすれば更なる進展が期待できますか。

宇治原：現役世代は全国各地への転勤もあり、年次幹事の編成整備は難しく、むしろ今後はホームページを利用したかたちで、年次幹事のコミュニケーションが図ればよいなと思います。

西坂：○七年から始まる団塊の世代に焦点を合わせ、魅力ある同窓会とは何か検討できればと思います。この世代の幹事の増員も必要でしょう。

——情報交換、異業種交流などの場の設定について会員は個々にどのようなかわつていったらよいでしょうか。

宇治原：例えばの話でいえば、会計士や税理士でご活躍なさっている方を中心にして、情報交換や異業種交流の場が出来ないものかと考えます。

西坂：陵水ゴルフ会の盛況は地道な長年の先輩達の努力の積み重ねと、幹事の尽力のおかげです。これは一つの成功のモデルでしょう。

守谷：先輩、同輩が出来るだけ卒業生の面倒を見る努力が必要です。面倒を見てもらった人は内容を公表して、会に少額でも寄付されれば双方身が立つし、組織も大きくなり活性化につながります。

——「東京陵水」「陵水ホームページ」の利用の活性化、スタッフの充実対策などへの取組みは。

宇治原：「東京陵水」新聞は、大学新聞会OBの連携が確立されつつあり喜ばしいことです。ホームページは現役の人達を中

心に……と考えていますが、今はまだ大学三十八回の大原孝明さんに全面的にお願いしている状態です。同好の士が集まって頂ければと切望しているところですよ。

西坂：前述の団塊の世代をテーマに「東京陵水」紙で特集を組んでもらえればと思います。彼等が退職後どんな期待と不安を持ち、それに対して同窓会として何が出来るか、アンケートとか対談などの企画を望みます。

——新聞編集部も世代交替に真剣に取り組んでおり、少しずつ成果が表れているところです。ところで東京支部名簿の作成により、会員の結束を一段と高めた

いとの意見があります。

守谷：名簿の洗い直しが必要で、転勤による関東在住者が捕捉されていない可能性が多分にあると考えられます。

宇治原：個人情報保護法施行の直後でもあり、しばらくは様子を見てから着手してはいかがでしょうか。

——旧高商系大学の同窓会現状などをお耳にすることがあります。活動を参考にするための交流などはどんなものでしょうか。

宇治原：残念ながら何一つありません。聞いてみたいとは思っ

ております。

守谷：先輩諸氏から話を聞く機会があります。楽しそうで、いつかは我々もと願うこともあります。



——滋賀大学を一層世に知らしめたいので、旅行会社と手を組んで滋賀大ツアーを組んだり（滋賀県は京都、奈良に次いで歴史文化の遺蹟の多いところ）、都内の受験校にPRに出かけたり、滋賀県観光協会が主催の近江歴史塾（年3回×4回開催）

にテーマをもつて参加するといったことはどんなものですか。

宇治原：これからそのような企画は必要だと思います。大学側と協議する必要があると思います。

守谷：大いに結構ですが、誰が主体となってやるかが問題です。東京陵水会が全部企画実行というのは、現時点では無理でしょうね。

——これからの地方国立大学は地域に密着して、その発展に

寄与することが求められるといわれます。医学部問題、教育学部問題がそうですね。滋賀県、彦根市などと協議を進め、それらのニーズにあった大学づくりをするとなるとすれば、どんなことが考えられますか。

宇治原：大学は地方にあつて常に先駆的、先導的役割を果たすものであり、地方のニーズにあわせるというよりも、グローバルスペシャリストの養成の過程で生まれるスキルや知識、あるいはリスクセンターで開発される手法等を、先端的に地域社会に提供する牽引的役割を果たすべきだと考えますが、いかがでしょうか。

守谷：やはり地方振興、地方開発の基本方針とか、基礎理念構築等々に参画して地方発展に寄与すべきと考えます。医学部は医療に即して地域社会に貢献しており、教育学部も古くから滋賀県の教育の実際に貢献してきています。

西坂：最近の卒業生は中部、関西の比率が高いし、地元ともいえる京滋の企業への就職者も多い。大学が滋賀県、彦根市の双方とよりこまかい関係を作ることは重要です。域内経済の繁栄、自治体の改革について学識経験

者として大学教官、陵水会員がサポートすることもできるかも知れません。このためには、大学の正式な機関として専門チームの発足も必要でしょう。

守谷：締めるに当り一言。大学として一番有効な活動として、国立大学に対する寄付金を所得控除とする運動を全国的に展開すべきだと思います。米国では長年実施され、私大であるハーバード、エール大学等では三、四兆円の基金で運営され、国から独立して立派な業績を残しています。わが国においてこの制度が実施されると滋賀大学でも毎年二、三億円の寄付金が集まるものと推定されます。高額所得

OBが年当り一千万寄付することとは十分予想されることです。税金にして威張られて貰うより、文部科学省の謂れ無き干渉と横暴を排除すべきだと思います。

——陵水会活動の全般にわたり、また東京支部の今後の運営について、参考になる貴重なたくさんのお話をありがとうございます。新年に当り、今年も母校が全ての面で一層充実の方向に向かい、陵水会が、会自らと母校支援活動において更に大きく展開されるよう祈りたいと思います。

平成十八年度 第二回役員幹事会の開催

平成十八年十一月十五日(水)
午後六時から、渋谷区代々木の新日鉄代々木倶楽部において、本年度第二回の東京支部役員幹事会が、役員幹事約三〇名の出席の下に開会された。議事進行を宇治原嘉政支部長が当り、役員改選の件、東京陵水九十二号の編集進行状況、年会費振込状況の報告、平成十九年度総会、その他の順番で報告審議された。

当役員幹事会として、現支部長・宇治原嘉政氏に支部顧問として執行部を指導されたく要請した。

○評議員候補について

現役員を退任する評議員は退任し、新役員に就任の場合は評議員にも就任を予定すべく内規通り進める。定数十六名は確保することになっている。

○「東京陵水」編集進行状況

同編集部から、例年通り来年一月発行を目処に予定通り作業を進めている、インタビュー記事の取材は終了し寄稿の受付も順調である、スタッフの充実を目指して努力中との報告あり。

○役員改選について

役員の任期は二年。今年現執行部の任期が終る。特に支部長と幹事長の任期は支部規定で最長四年としている。改選期(十九年度)に当り、次期役員候補として次の諸氏を現執行部で推薦。東京支部長・西坂徹雄(現副支部長)、同副支部長・守谷貞夫(現幹事長)、幹事長・加藤博善(新任)、副幹事長・山本保、木津勝治(新任)、柴原良昭(新任)、中村嘉秀(新任)、監事・高木早苗、星出潔。

○年会費の収納状況

事務局から、本紙十五ページ記載の内容の報告と振込手続き促進の要請があった。

○平成十九年度総会準備状況

年次幹事当番は大学十九回卒が当る。同回門平孝二郎氏により、現況の説明があった。開催予定日は平成十九年五月十六日(水)。会場はホテル日航東京(江東区台場一丁目)。特別講演の講師には、大企業の経営者を候補に折衝中。アトラクションとしては企業の室内演奏グループによる演奏会を予定している。十九時審議終了のあと懇親会。

新任の副幹事長候補はそれぞれ定例総会の年次担当幹事として、中心的役割に当った。

推薦を受けるに当って、特に幹事長候補の加藤博善氏(大14回)から挨拶があった。なお、

こんにちは

株式会社CSKホールディングス
取締役会議長

青園 雅紘氏 (大16回)

昨年九月八日(金)、港区南青山の青山通り梅窓院の一角に屹立するCSKグループビルに、ご多忙の中お訪ねした。

青園さんは福井県のご出身と伺っておりますが。

青園 そうです。福井市です。高校は藤島高校でした。昔の福井中学です。陵水会理事長の堀川氏は存じ上げております。



CSK本社ビル

福井は震災がありましたね。

青園 三、四歳の頃だったんですが、家の下敷きになりました。数時間、下敷きで足を複雑骨折いたしました。はつきり覚えてるんですよ。さすがにあれだけのことは鮮明に。隣りが機屋さんの蔵だったんですが、ぐらぐらと揺れてからその蔵がぐ

っと傾いて、うちの二階が押されて落ちたんです。火が出てれば終わりだったんですが、幸いに我々の地区はなかったんです。昭和二十三年六月二十九日、当時、サマータイムでしたから、夕方の四時、いまでいう五時でしたか、直ぐに暗くなる時間ではなかったですが、助かったときは真暗でした。助けるためにのこぎりで切ったおが屑が顔に広がって、そしてローソクの火が見えて助かったんだなあと思いました。

——その時のご家族は。

青園 母親も横と一緒に。おなかをやられて。おなかですから骨が折れるということはないんですが、本人はもう駄目だと思ったようですね。私は子供のことでそれからそういうことはわかりませんでしたね。

——その後、お怪我のほうは

青園 負んぶされて病院へ通った記憶はあるんですが、いつ治ったかについては記憶にないですね。幼稚園にはもう元氣に行っていましたからね。おそらく一年くらいで治ったんでしょう。傷跡は残ってますがね。私は地震に因縁があるんですよ。阪神大震災にも遭いましたね。野村

——怖い思いを二度されたわけですね。芦屋のときは怪我等などはなかったんですか。

青園 幸いに、なかったですね。マンションでしたが大きな音が出て、建物が爆破されたのかな、爆弾を仕掛けられたのかなという感じでした。地震だと思わずでちよっと時間がかかりましたですね。その後、グラグラときましたからね。関西地方ではあまり地震はないといわれてましたから、瞬間、東京は完全に潰れたと思いましたよ。大阪であんな大きい地震でしたからね(笑)。

——会社は大丈夫だったんですか。

青園 大丈夫でした。その朝、会社に行くのが大変でした。高速度道路が途中でボーンと折れてバスかなんかが落ちてましたが、あの現場を見えています。ちょうど車が迎えにきていて、いつもの道を行こうとして出たんですが、あの状態ですから通れませう。それで戻って山のほうをずーっと越えて大阪に着きました。

そこも直後に通行止めになりました。

——その時のお立場は。

青園 大阪支店長でした。大阪がどうなってるかわからないし。たまたま家内が来てくれていたんです。マンションは電気と水が平気だったんで、何とか炊き出せ、おにぎりをたくさん作りましてね。会社は昼頃着いたんですけど、部長クラスと対策会を本部に作りまして。先ずは飯を食ってと握り飯を出しましたら、みんな朝飯は食ってきただけなんです。出社してきている連中は大した影響を受けてないんです。たまたま梅干しはあったんですが、ある部長が鮭とかいくらはないのかなといましてね(笑)。

とは確かに大事なんですが、もっと大事なことがあるんじゃないかと。人間の生と死について考えましたね。それが野村證券をやめるきっかけになりましたね。現役の役員で、自分から辞めたのは野村證券の歴史のなかで、私しかいませんよ。ちょうど五十歳のときです。それです、ね、遡ること七年前、四十三歳のときに役員になったんですが、その時に朝日新聞の「人」という連載コラムがありましてね。そのときに生意気なせりふで「人間五十年、五十になったら一回考えてみよう。とりあえずこのまま突っ走って五十になったら考えてみよう」といったんですよ。これ、活字に残ってますから。

大川さんとの出会い

——後々お聞きしようと思ったんですが、それからCSKさんに移られたんですか。

青園 そうです。かねてからこの創業者の大川功さんからずいっと十七年間、誘われ続けていたんですよ。一度はこの人と仕事はしてみたいなあと思っていました。野村を辞めて何かやるんだったら、一度大川さんと仕事しようと思ってましたから。

——だけどCSKはIT関係ですよね、証券と全く違いますね。最初の出会ひのエピソードなんかは。

青園 本に書いたんですが、本店の営業企画部の次長をやったときに、役員の本部長を



それで「ああそうか、五十の節目がとうとう来たか」ということがありまして。それと、その年の三月に、人に誘われてですが、奈良・東大寺二月堂の水取りに籠ったんです、夜通し。そこでいろいろ考えて、自分なりに総括しましてね。自分がこうやりたいということは、なかなかやらしてくれなかったです。それから四年連続で籠りました。四年連続は私をはじめのようにいわれました。

サポートする仕事で、支店に発破かけたり教育したりという首都圏関係の本部の役をやってましてね。当時、大川さんが新宿の支店で取引をしてたんですが、トラブルがあり、野村證券の常務にクレームが入りましてね。「ちよっと大川さんそこへ行っ



んだかんだと一時間ぐらい話してましたか。もともとは大阪の商人ですから、「なんか儲かる株はないか」と結局はそこに行くんですが、「わかりました。何かありましたらご連絡申し上げます」「そうか、そうやったら儲かる情報でもくれや」と言われてその日は帰りました。その頃は今と違いお客様に徹底的に売り込むような時代ですから、支店に売り込む株が残ってるわけですよ。本当は支店が売らん

ですが、営業推進ですから、面倒くさいし僕が手配しましてね。三十万株だったか、六、七億です。嵌め込みましたよ。

その時に大川さんから聞いた話、世の中、重厚長大から軽薄短小になる、ソフトの時代だ

ということをおっしゃったわけですよ。「ああそうですか、そうですね」と。帰ってきて、

「さっきはどうも、東京電力どうですか」と。「えーっ、重厚長大そのものやないけ」「まあ、

いいじゃないですか。名刺代わりですから」「まあ、しょうがないな。名刺代わりに貰っておう」ということで、最初に会った日に何億かの約定をして、それが最初です。「おもしろい奴やなあ」ということになったわけですね。そんなのいないですよ、だいたい(笑)。すぐに大川さんと仲良くなりましたからね。そのあと、その担当していた支店の支店長にぽんと出されたんです。新宿野村ビル支店です。四代目の支店長でしたか。

——それは最初の支店ですか。
青園 いや、最初は町田支店です。三十六歳でなりましたですね。このことも日経に書いてましたですよ。「三十六歳で支店長誕生」と。その支店長のあと

が、さっきの本部の営業推進の次長の発破かける役で、それからまた支店です。それで本格的に大川さんのお付き合いが始まったんです。一九八五年からです。ちよっと十年くらいです。

——当然、大川さんからのご薫陶なんかはありましたでしょうな。

青園 なんかの時に電話がかかってきて「ちよっと飯食いに行こう」とか「飲みに行こう」と

か。そんなことで、大川さんがいま誰と、またどういう女性と、どここの芸者と付き合ってるかとかを秘書が聞いてくるんですよ。支店に電話がかかってきて「支店長、うちの大川はこの女性と付き合ってますか」と（笑）。「そんなことわかるわけじゃないですよ」としか答えられませんよ（笑）。

政治家の道も

——結果的には、大川さんにはいい思いをされたんですね。
青園 そうですね。私としては大川さんに出会ったことは、今にしてみれば転機でしたよね。



青園 豪放磊落じゃないですなあ。非常に細心できめの細かい人ですね。典型的な大阪商人ですね。減多に乗りませんが、タクシーなんかで十円のお釣りも絶対受け取りましたね。一緒に乗って「はい、払っときます」といって、九百六十円に千円札出して「お釣りのいいよ」というと、大川さんは「それじゃ、わしが貰っとく」と。それほどなんです。そのくせ五億、十億、二十億の寄付はほんと勝手にやるんですから。「止めなさいよ。そんな勿体ないことを」。今度はこっちがとめるわけですよ（笑）。そんな人でしたね。

——大川さんはお幾つくらいだったんですか。
青園 仕事をスタートされるのが遅かったから六十代でした

ね。この会社をおこしたのは四十三歳の時でした。私とは十八歳違います。オーナーというのは気まぐれですからね。自分の失敗は絶対認めませんからね。オーナーは失敗がないですからね（笑）。

ですから、収入も抜群にいいです。しね、地位も安定してますし、野村もあの地位に行けば一生安泰ですよ。それを思い切って辞めたんです。給料も下がりました。大川さんが「幾らくらい欲しい」と聞いたら「お任せします」と言ったら、「今まで、わしもいろいろの人間をスカウトしたけど、給料のこと言わなかったのはあんただけや」。失敗しました。ものすごく安かったんです。ケチなおつ

うことを提案しますということ。を直属の副社長あたりに言っても伝わらないんです。「俺が出行かなけりや駄目だ、早く専務にしろ」と。「するよ」という話もあったんですが、専務になつたら辞めなかったかも知れません。経営会議に入ったらいいんです。もう一年待てよといわれましたが、それも大阪をもう一年やれですからね。その頃の大阪なんか、いいお客はM社くらいしかありませんでした。からね。仕事がないわけですよ。毎日宴会、日祝日はゴルフです。ゴルフは二回に一回は八十を切りましたからね。何やってるのかなあと思いましたよ。今日は吉兆、明日は大和屋、その繰り返しなんです。昼、吉兆で食って、夜、また吉兆です。「お帰りなさい」といわれて（笑）。嫌気がさして、やっぱり転機があったんですね。地震があり参院選のこともあつて。

——野村での話をもっとお聞きしたいですが、大学のゼミはどうですか。
青園 西藤先生です。産業構造論です。楽勝ゼミといわれてました。両方とも優を貰いました。でも早く亡くなられたんですよ。

——西藤先生のゼミの思い出はありますか。
青園 西藤先生は学問の範囲が非常に広かったです。産業構造論、工業経済論、保険論と。それと宗教にかなり造詣が深く。宗教論もやられてたんですよ。僕はたまたま出てたゼミで、経済論かと思ったら論語をやってます。それで論語に関心を持つようになりまして、学生時代の三年、四年に論語を読みました。西藤先生は我々学生に対して、ちょうどびつたりくるような論語の一章節を解説してくれるんです。含蓄のある先生だなという印象があります。ゼミには数えるほどしか出てませんが、一度だけ私も発表させて欲しいと、二回目に出て行って論語を発表したんです。そしてそのとき「君、変ってるなあ」と言われて、ああこれで大丈夫だな。いい印象を与えましたから。

四年の就職活動が始まる時に、西藤さんから呼び出しがきましてね。企業から頼まれ誰を売り込むか、「ここへ行ってくれ」とゼミに全然出てない私に指名してくるんです。紹介されなくていくところなんてろくなところないですから「ちょっと目指

すところがありますから」と。
先生から薦められるのは、あとで辞めたりするときに、辞めにくくなりますからね。

——学生時代、運動部とか、同好会とかは何かやってられましたか。

青園 ヨットをやりました。
——昨年から昨年の経済雑誌の「フォーブス」で青園さんがヨットで紹介されていた記事を見かけましたが。

青園 この部屋で写真を取りましたよ。学生時代の我々のヨットは強かったですからね。ヨットのためにゼミなんかは出席できなかつたんです。インカレ準優勝が二度です。

企業に癒しを
——今でもヨットは乗ってられますか。

青園 乗ってません。会社ではヨットクラブというのがありましたんですが、いまは休部しています。復活させようかなと思っています。いま企業では精神障害が多いですよ。それに対する会社の施策ですが、ひとつは農業、例えば畑仕事という場を作っております。癒しの空間、リフレッシュするための場ですね。

——土に還るということを望まれるのは、若い方にもいらつしやるんですか。

青園 耕すということだけでも人間に変化が出てきて違うんですね。農業は将来的には会社の本業にしようと思っております。

青園 ヨットをやりました。首都圏中心にあちこち土地なんかを手配しています。十月からは胡蝶蘭の栽培をやります。CSKグリーンサービスといつて障害者の雇用をいっしょにやろうということですよ。五十八人の障害者がいますが、この十一階のフロアーを社員のコミュニケーションの広場として全部開放しているんです。打合せしてもいいし居眠りしてもいい。売店にも障害者の人も働いています。いずれ定年延長とか再雇用、高齢者の環境改善に努めますが、ただ、コンピューターの仕事は年とってできる仕事じゃありません。働きたいという人を辞めてくれというわけにはいきません。リストラをやる会社は経営者として失格だと思っています。何とか雇用機会を増やし、障害者の皆さんに雇用機会をつくることは大事なことです。社内の高齢者に対しても準備をしようとしております。

——傘下の会社はどれくらいあるんですか。

——土に還るということを望まれるのは、若い方にもいらつしやるんですか。

青園 幾つくらいでしょうかね。聞かれると思つてたんですが、連結対象で五十くらいですか。

——その中に先ほどのグリーンサービスとかの先進的な会社があるんですね。

青園 そうです。証券会社のCSモ証券もうちの会社です。

——業界の規模は。

青園 全国に七千社あります。仕事は十五兆円くらいでしょうか。それを七千社で割りますと、二億円少々です。いかに零細企業が多いかということです。アメリカは日本の三倍以上の四十兆円ほどありますが、会社は数百ですよ。優秀な技術者を十人抱えて一人が二〇万円ずつ稼いでくれれば月々百万円出るわけですから。人だけの話ですから、お客さんのところで仕事をしますから、オフィスも要らない、これが大川流ビジネスモデルなんです。

青園 業界で一番大きいのがNTTデータです。再編が早晚起り得ますね。こじんまりとやっていると案外と頑張れるんですが、中途半端の規模のところはある程度リスクをとらなければいけませんからね。専門的になりますがNTTデータとか野村総研

とか日立何とかさんらは、系列なるものですか。

ですからね。系列のところは再編が起こっています。メーカー系、銀行系、商社系、証券系、あと新日鉄系の新日鉄ソリューションズとか。我々のような完全な独立系のところもいよいよ再編の時代に入ってくるのかなあと思われまふ。こちらは大きな波を食らえはひとたまりもありませんね。財務基盤をきちつとしていくか、収益を確実にあげていくようにしなければなりません。ようやくそれが出来ました。そのかわり不採算部門をばんばん切りました。

コンピューターというのは昔はどっかい大型の汎用機がありましたですよ。運用管理は二十四時間です。「自分とこの社員をやらせるのはなかなかしんどいよ」、「三Kみたいなもので、どこか外でやってくれませんか」とこれが外部ビジネスのスタートみたいなものです。そんな仕事から徐々に進化していつて、かつこよくなつたんです。かつこよくなつたからといって、儲かるかといえは決してそうではない。やっぱり泥臭いのが一番儲かりますからね(笑)。

——この業界はまだ大きく

なるものですか。

青園 もう、大きくならないでしょう。NTTデータだって完全にNTTからたぐさんの財産を貰って独立した会社なんです。野村総研だって親会社が野村證券で、親会社で真面目に仕事をして太ってきた会社です。NEC何とか富士通なんとか、日立なんとかさんはみな系列会社で、自らがリスクをとってないですよ。自分で社長をきめられない会社ですからね。社長どころか役員も決められないところですよ。そういうことは徐々になくなつて行くでしょうが、最初、そういう体質で始まつてる会社ですから、ある意味では本場の意味での市場経済をくぐつてないわけです。価格競争力とは一体なんだということになりますよ。我々は独立系ですから別にハードを売つてゐるわけでも何でもありません。裸の我々にとつてのコストはこれで、採算ラインはこことなるわけですが、ハードを一緒に売つてゐる会社なんかはですね、「ハードはただで売つてもいいよ」みたいなノータルでいきます。

青園 コンピュータが一般的に使われだしたのが昭和四十三年の旧国鉄のみどりの窓口なんです。

あそこから大型コンピュータの汎用機がずーと企業に入って来たんです。そこで我々のビジネスが生まれました。常に需給関係がタイトで、仕事のほうが必ず多かったわけです。営業する必要があるませんでした。競争がなかったんです。そういう状態で三十数年間きましたから、常にお客さんのほうが「人を出してください、お願いします」という時代が続いたんです。どこの会社も情報システム化に関してはシステム部というのがあるって、「あそこの予算は削っちゃ駄目だ。情報システムはだいたい企業の成長、命運を決めるんだから変に予算を決めるということとはまかりならん」と。そしてシステムということやコンピュータのことは誰もわかんないですから、まさに聖域だったわけです。予算を充分持つてますから、情報システム関連のうちみたいな会社は、何とか馴れ合い感じで仕事をし、あまり苦勞をしなかったんですね。それが徐々に変化があつて、「ちょっと待てよ」と経営者が目覚めてきたわけですね。「何でも無駄なコンピュータ投資をしてるんだ。CSKは儲けすぎてるんじゃないか」と。経営ト

ップが目覚めますと、主客転倒して買い手市場になってきました。そして初めてそこに市場経済の原則みたいなのが導入されたんです。これがここ四、五年のコンピュータの業界です。ただ安定的なお役所関係の仕事をもつてNTTデータとか、野村證券みたいな親会社をもつて野村総研は安泰ですね。そうではない我々みたいな独立系は自分でお客さんを取つてこなければならん、いろいろな波にもまれてますからある意味では強いですよ。

——市場規模十五兆円はそんなに伸びないですか。

青園 そうですね、一時は年率十五パーセントとか二十パーセント伸びましたが今どうでしょうかね。実際に感覚的には売上で五、十の間、いいとこ七・五パーセントくらいですか、年成長率が。余計儲けにくくなつてますから、利益は五パーセントくらいまで落ちています。ちょうどそういう時期が来て業界がえらいことになったぞという矢先に好景気で今少し報われてます。でもこれも二年くらいで後どうしても波がきます。これが本格的な再編です。具体的には申し上げられませんが、いよいよ

よ今から再編の準備として資金を確保して全力で備えるということですよ。

——さっきアメリカの話が出ましたが、この業界は対外的な競合とかあるんですか。例えば韓国とかアジアとのITの話題になる国との。

青園 ありませんね。殆んどがローカルのビジネスですね。コンピュータのハードとそのハードを動かすソフトウェアがあつて、そのハードとソフトを組み合わせてシステムにするということですが、そのシステムを作つたりシステムを動かしたりするのは我々の仕事です。ただ我々のところはそれではとても収益にならないということ、それに付随してくるいろんなビジネスがでてくるじゃないですか。コールセンターみたいな、そういうものを拡充してるんですよ。泥臭い仕事ですよ。ただ、お客様からの要求を聞いて返事するわけですが逆に営業するコールセンターなどを販売するのですよ。自分ところの社員じゃなしに、我々のような専門の会社に販売を依頼する、仕事に付随するビジネスをサポートするような仕事が進化してきてますね。

——東南アジアの人とかを採用されてますか。

青園 いやあー、言葉の障害がありますから。あまり海外の同業他社とかと仕事のことでバッティングすることはないですね。同じ業界でアメリカから出てきているのもうまいつてません。

ただ、中国とかインドの安い賃金の技術者を使つてこちらの仕事をやっていくということはありますよ。仕事は日本とやるんだけど、仕事をこなす拠点を中国・上海とか大連に持っています。大連で三百五十人くらい、上海で百人くらいですか。

——電子専門学校とかから求人されますか。

青園 あまりいいですね。コンピュータサイエンスなんかを専門にやつてこられた学生さん、もうらっしゃいますけれども、工学部関係と文科系と半々くらいですね。別に学生時代に専門的に勉強してきたのでなくて、あまり関係ないですね。六カ月間研修やります。

——それでもいい一人前ですか

青園 いやいや。株屋と違うんですから(笑)。株屋は翌日から一人前ですから(笑)。一人前になるにはだいたい三年くらい

でしようかね。寿命が短いですからね。バリバリ働けるのは三十五歳までとか。

日本棋院五段の腕前

——話はかわりますが、ご趣味は。将棋とか碁とかお聞きしたんですが、お強いんですか。

青園 碁です。強いことはないんですが。一応日本棋院の五段を貰つてます。昨年から日本棋院の理事をやっています。いやいや私は呉れるからといって貰つてるんですから。

CSKは碁の世界選手権のスパンサーをやつてまして、もう五回やりましたね。台湾を国に数えれば日韓中台との四カ国から五人づつ一堂に集めまして三日間総当りです。毎日十番づつです。世界のトップが二十人です。やるんですから。

——日本で活躍している外国人棋士もいるんですね。

青園 例えば張栩王とか、今年は出てこなかった林海峰も去年まで出てきましたからね。王立誠とかそういう連中です。台湾からきているトップ棋士です。五年前からやつてまして賞金四千万円です。年一回、五月にやるのに一億円くらいかるんです。だけど今年の五月、大

分で五回目をやりましてね。終った時に「うーんこんなイベントやっていいのかなあ」、自身は結構面白くてやってますけれど「誰の楽しみのために、最初の目的でなんだったかなあ」と思いましてね。要するに囲碁の普及なんですけど何故普及させたいかというと、世の中がどんなインターネット社会、コンピュータ社会で何故でも効率化を追求するような社会ですから、このまま行っちゃうと人間の営みそのものに障害を与えることになるんじゃないかと。コンピュータが一番苦手とするゲームは囲碁で、ソフトウエアでアマチュアの三級とか四級ぐらいですからね。将棋には強いですよ。チェスはコンピュータのほうが強いですね。それだけ囲碁というのは創造性に富んでいる、人間性に富んでいるゲームです。ですからそれが普及しないと、益々おかしくなるんじゃないかという思いがしまして。それと中国とか韓国とか

その中で飛びぬけて強い人だけがプロになります。プロになると収入が凄いです。スターですよ。日本ではちっちゃい子供は名人が誰だとかは知りませんよね。韓国の子供たちには李世ドル、李昌鎬とかいう名前は英雄なんです。碁は頭をよくしてスターを作るといふそういう国と、たったの三十年くらいの間に交代しちゃったわけです。生れたのは中国ですけども、育てたのは日本ですからね。いま日本で、二十歳以下のプロ棋士は十三、四人ほどしかないですよ。中国は百四十人いるんです。韓国でも四、五十人います。日本はもう五十歳超のお爺さん碁打ちばかりが、九段とかいつて最高の段位をもつてやっていきます。もうこうなると底辺からやっていかないとしょうがないなあと思っています。イベントで格好よくやるのもいいんですが、底辺拡大ということ、ひよっとしたら止めるかもわからないですね。

現在、既に小学校に導入されるんですかとようになってきています。課外授業で早稲田実業の小等部に採用され、うちから費用はもつてプロ棋士を派遣しています。同志社とか立命館

のやはり小等部がやってくれとか、あちこちの小学校から声がかかっています。大会とかイベントを開くにくらべれば本当に数多くできますからね。その意味での社会貢献とかで、地道にやったほうがというふうに思っ



再会

平本 勝章
(大15回)

昭和四十二年(一九六七年)に卒業、東京に本社がある食品会社に職を得た私は、会社勤めの大半を人事労務部門で過してきました。

当時はまだ、労政課という古めかしい名称の労務担当の部署が幅をきかせていました。というのも労働組合の活動が迷走しながら尖鋭化を辿り、それに対抗するように第二組合が生まれたり、外部の支援組織の動きも活発になりはじめていたからです。

三十歳半ばで私は、茨城県にある基幹工場の労政課を受け持つことになりました。連日のように団体交渉に明け暮れました。商品開発や販路の拡大などにくらべると、極めて後向きの仕事と言わざるを得ません。逃げ場

ております。

――彦根へは最近行かれましたか。

青園 彦根はですね、一昨々年の十二月十五日に、村重さんが亡くなられ、一昨年の一周忌に参りました。彦根でお腹すいて

のない焦りに、眉間にしわを寄せて自問自答する日も少なくありませんでした。

本社に戻ってから役回りは変わりがありません。部長とは名ばかりの「労担」として交渉の前線に立ちました。おそらく当時の経営トップは重宝したのではないでしょう。はたして私がこの仕事から解放されたのは、ようやく組合活動が穏やかになった昭和六十年代後半、すでに五十路を目の前にしていました。

会社の年度事業戦略や中期経営計画を作る立場になりました。この頃からでしょうか、「待てよ」と自分に言い聞かせては、しばしば立ち止まるようになっては、たのは。心に少しゆとりが出来たのかもしれない。暫らくして、残念ながら昨年他界された作家の吉村昭さんとの親交が生まれるという幸運に恵まれたことも影響したのでしょうか。氏の手紙書き下ろし長編の読後感を手紙

飯が食えないときに、村重さんの所へ行つてましたですね。亡くなられる前に一回お会いできてたらなあと思いました。

――今日はいろいろ貴重なお話承り勉強になりました。お忙しいところ有難うございました。

に認めたところ、丁寧な返信を貰ったのがきっかけになりました。吉村さんの文学は戦史物にしろ歴史小説にしろ、あくまで史実に忠実な執筆姿勢と、平易で簡潔な文体に特徴があります。短編を含め、私は吉村さんの作品を殆ど読んでいました。こ

にもその奥の深さを書き記しています。「会社勤め三十年、素晴らしいじゃありませんか。羨ましいですね。私も若い頃十年あまり経験がありますが、奥が深いと思うですよ、こいつ(酒)と同じように」――吉村さんは昔の友を懐かしむように盃を口元に近づけました。

これがヒントになりました。私も昔のともに再会したい。強い想いが、体の中をかけめぐりました。

※ ※ ※

東寮1号室。昭和三十八年(一九六三年)春、私が入室した

偲聖寮の正面玄関にいちばん近い部屋です。電話の取次ぎには便利でしたが、如何せん来客が多すぎました。夜、酔客の訪問が後を断たず、廊下を走る下駄の音が明け方まで鳴り止みません。寝不足は講義中に解消したのを覚えています。

新進の芥川賞作家、大江健三郎や気鋭の批評家、江藤淳と出会ったのはこの頃でした。難解な吉本隆明や埴谷雄高と格闘したのは、寮を出て芹町の下宿に移ってからだったでしょうか。京都で求めた丸山真男や橋川文三の論文は、今も書棚の片隅に埋もれています。

傍ら詩を書きはじめました。大岡信や谷川俊太郎、鮎川信夫や長田弘の現代詩の世界にのめりこんでいきました。学内新聞への投稿も試みました。入選作品の副賞に貰った万年筆は、修理を重ねながらついこの間まで使用に耐えていました。詩集の自費出版を企て、引き受けてくれる印刷屋を探し回ったりもしました。

経済学部在任しながら会社決算の仕組み、ひいては損益計算書と貸借対照表の区別さえ、全く知らないまま卒業したのではないのでしょうか。それで

も許されてしまう風土が大学にはあったことは確かです。

※ ※ ※

文学と言う昔の友との再会に、近づいたかどうかは定かではありません。その証拠に会社では、大株主の強い意向もあって、コスト構造の見直しを余儀なくされ、リストラの大なたを振るう段階に立ち至っていました。業務問題がひと息ついた後の、生き残りへの正念場でした。

私たちのチームは、シナリオづくりに励みました。二千四百名の社員を六百名削減して、スリム化を実現させようという大胆かつ深刻なものでした。仕掛け人の一人として渦中に放り出された私は、それでも会社再生のコア（核心）を担う大仕事と割り切って、心を鬼にして事にあたりました。疲労感が全身を覆いました。

要員の削減が一段落、会社が債務超過を免れて一人歩きを始めた頃、私は当然のように子会社へ転出していました。

絶好のチャンスでした。私は今度こそ昔の友を失うまいと、原稿用紙と向き合う時間の捻出に腐心しました。六十歳まであ

とわずかです。長編小説と連作の長詩の二本立てでの書き込み

がスタートしました。

予測はしていましたが、なかなか筆が前へ進みません。資料を集め、取材にも時間を充ててきました。従ってテーマは、しっかりと設定されています。意欲だけが空回りしているのに気付き、肩の力を抜いては深呼吸を繰り返しました。表現方法や前後の脈絡、文体のこなれ方――試されながらテストを受けているような心境が、およそ一年間続きました。

四百字詰め原稿用紙にして三百枚の長編小説を、曲がりなりにも書き上げました。脱稿の瞬間は爽快な気分になることができました。

小説は、さる出版社が興味を示してくれた縁で、全国刊行が実現しました。初版は二千部でしたが、思いがけなく増刷にこぎつけることが出来ました。どこにでもある平凡な家族が、はからずも「色覚異常」というハンディを背負いながら、懸命にかけぬけた昭和の三十年間を追い続けました。どうしても書き留めておきたいテーマでした。

すでに死語になりつつある色盲色弱という言葉ですが、つい十年くらい前までは当事者にとっては、かなり厄介な代物でした。

た。特に多感な子供たちには心の重荷として立ちほだかつていたのです。

一部のマスコミが取り上げてくれたり、文芸誌の書評に掲載されたこともあって、講演会やシンポジウムに招かれるようになります。子会社の役員は晴れて退任、年金生活にはいったばかりの私は、声が掛ければ全国どこへでも出かけました。それは今も続いています。

困ったのは、連作の長編詩が頓挫してしまっていることです。次作の小説も、思うようにはかどりません。文芸誌に短編やエッセーを書く機会を与えられ、自己満足してしまっているの

しょう。寝室を仕切っただけの三畳ほどの書斎で、新しい年を迎えました。間もなく六十三歳になる私は、しみじみと昔の友との再会を堪能しています。階下で孫の声が聞こえてきました。（了）

空から朝帰り

四塚 行雄（大2回）

はじめに

私の生まれ故郷は朝鮮（現在の韓国）慶尚南道金海郡（注一）、

そこは韓国の「母なる川」とも呼ばれるナクトン川（洛東江）が作り上げた肥沃な大三角州の田園地帯、その周囲約二十四キロメートルである。

向島会のこと

この三角州は亀浦（日本発音：きは 韓国発音：こつぽ）という駅から幅八・四メートル、長さ千六十メートルのコンクリートの橋を渡ったところにあるところから「向島」といわれていた。

この向島は全部洛東江から流れ出た砂で出来上がっていたから、果樹とくに梨の栽培には最適で、日韓併合条約（一九一〇年）前から日本全国（島根、山口、熊本、佐賀、広島、滋賀他）から私たちの先輩が続々入植して、果樹園を経営しその家族単位数百軒余、四個で一貫目もある皮の薄くて果糖の多い梨を主体とし、一房が子供の片手では持てない大粒で房の大きい葡萄が採れた。

果樹園を苦勞して立ち上げ育てた集団も昭和二十年の敗戦で全員引き揚げ生活が少し落ち着いてきた昭和四十三年を第一回目として毎年一回国内各地で、『向島会』が開かれてきた。

向島会の開催地は国内が主体

であったが昭和四十九年、平成七年、平成十五年、それに今年
は釜山で開催した。私は引き揚
げた後釜山に初めて参加した。

今年の行程

今年は参加希望者二十三名が
十月十一日に博多港に集合、昔
のような関釜連絡船ではなく釜
山港までは高速船で渡り、釜山、
金海など観光……出身校の洛東
小学校の視察、旧住居地の探索
他……というコースであった。

問題の発生

関東地区からの参加者は羽田
空港から福岡空港へ飛び、帰
りはその逆という方法をとった。問
題は福岡空港から羽田空港へ向
かう十月十三日の夜に発生した。

羽田空港の離陸は十三日の二
十時前であった。ところが発着
便の混雑から二十時過ぎからの
のろと機体は動き出したもの
の離陸直前になって、パイロッ
トが機体の異常に気付きスタ
ート地点に戻る。たぶん機体の整
備点検を再度行っただけと思わ
れるが、引き続き機体を使用す
る事を諦めたのだろう、乗客全
員を搭乗待合所に移したのが二十
三時前。やむなく別の飛行機に
りかえ福岡空港を飛び立ったの

が二十三時二十五分、羽田空港
に到着したのは十四日の零時三
十五分であった。

到着時間からして交通機関は
タクシーしかない。しかも長蛇の
待ち合わせ行列、帰宅は朝二時
三十分であった。まったく「空
からの朝帰り」となった。航空
会社の対応に問題がなかったと
は言えないが、考えようによつ
てはパイロットの決断で命拾い
をしたのかもしれない。乗客全
員にはタクシー代が支払われた。

今回の事故からの教訓

一、航空機の整備点検にマンネ
リ化が無かったか、このこと
は私たちの日常生活にも言え
るのではないか、「日々新た
にまた新たな工夫を加えた日
常生活」でありたいもの。

二、何か違和感を覚える、とい
う感性が働いた時は虚心坦懐
に受け入れること。私が社会
人になって聞いた話がある。

「昔、社長が部下の作成した資
料を見て何か違和感を覚えた。
どこかという指摘は出来ない
が資料の再検討を命じ、その
結果誤りが発見され、大事に
至らなかったということ」。

三、便利さの影にマイナスがあ
ること。飛行機は早くて便利

だが、失われるものの可能性
があるということ、の体験で
あった。

おわりに

いかりなく おそれもなく
つかれなく くなく うむなく
やむこともなし（六無）（注二）

（注一）司馬遼太郎によれば日
本人はアジア諸民族の雑種だ
けれども、その血液の一部は
古代、金海（キメ）から流れ
てきたといえるかもしれない
……司馬遼太郎の風景「湖西
のみち、韓のくに紀行」一九
九八・一・二十五NHK発行
参照

（注二）この文言は昭和三十五
年父母と一緒に初めて長野の
善光寺におまいりした際、善
光寺の玄關脇で、布製の畳大
の立て看板に墨で黒々と縦書
きしてあったもの。私の名刺
の裏に同じ文言で捺印し自戒
としている。

聖聖寮の仲間と巡る三河湾の旅

林 史 欣（大8回）

真夏が来ると聖聖寮時代から
の僚友と続けてきた旅に出ま
す。仲間九人で七夕会（一年に
一度の逢う瀬を楽しむ）と名付

けた旅行会、これまでに連続四
十四回の開催実績です。この年
はかねてから溜めていた三河湾
旅行をいよいよ実施しようとい
うことになりました。ところが

一人は前年軽い脳梗塞で行動不
自由、一人は胃がんの疑いで手
術、集まったのは七人。

三河安城駅に全員正午到着。

対岸の日間賀島へは意外の快
速ぶり、波を蹴立てて五分強で
同島西港に接岸。

この島、人口二千四百人、小
中学校が一つづつ。漁業が生業。
給水は本土から水道で通じてい
ます。

幹事の手配した乗用車に分乗、
先ず訪ねたのが半田市のミツカ
ン酢本社。もともと酒造りだっ
たが、用途の狭かった酒粕を原
料にして粕酢の醸造に成功、こ
れが江戸前寿司の旨さを飛躍的
に高め、現在の寿司ブームに繋
がったとのこと。一棟五十間ほ
どの工場数棟は、周囲の石垣と
濠に合せた風景に江戸情緒を十
分に残していました。工場の一
部が博物館「酢の里」、酒粕か
ら粕酢の工程を入社の浅い女子
職員のガイド説明、酢がベース
の健康飲料の試飲ができました。

翌日は台風襲来で海を渡れな
いかと恐る恐るベランダのカ
ーテンを開けてみました。意外に
も昨日よりやや大きい船が白い
牙があちらこちらに剥き出して
いる海を渡っています。港に下
りて船頭に渡海をまかせよう、
昨日の船が舳先をぐつと岸に突
き入れているのに何か安心感が
湧いてきて乗り込んでしまいま
した。頭の中では大揺れに揺れ
ると想像していましたが、五分
間の本土到着では嵐の海の実感
なし。

師崎港を出発して間もなく綺麗に整備された南知多道路に入り、そのまま小一時間、車の前面の真新しい高架鉄道橋を臙脂色の名鉄電車が渡って行くのを追った先、がセントレア（CENTRAIR）中部国際空港でした。

この空港の平面図はコックピットを伊勢湾のほう（西）に向けて翼前胴体が長く両翼を大きく広げた飛行機の姿。一階のウエルカムガーデンからエレベーターで中心部に入ります。コックピットの先に四千メートルの滑走路が南北に伸びています。翼前胴体部分の四階がレストラン、食堂が集まるフロア、屋上がスカイデッキで飛行機の発着が十分楽しめました。開港当時の熱気も落ち着きこの地域にしっかりと定着しつつあります。

衣浦湾をトンネルで抜け、三河湾沿いに一色町、西尾市と三河平野の真っ只中を台風の持ち込んだ強風に煽られながら車は進み、尾崎士郎資料館に到着。閉じてあった同氏が亡くなるまで執筆に取組んだ書齋に上げて貰い、この「人生劇場」の作家を地方の人達が誇りにしていることを感じました。

この地方では最大と言われる

正法寺古墳、山の張り出し部分を利用して造られた前方後円墳、人口の希薄な五世紀に作業員をどのようにして集めたのか、暫くは友と蘊蓄を傾けあいました。吉良港に近いホテルでの夕食はまたまたシーフードが充実、ようやく穏やかになりつつある海上に漁火が一つ二つ。

旅の三日目の朝、台風一過の三河湾は、海上はるかに島々が霞み薄い霧のかかった海面は静かにきらめく陽光を浮かべていました。幹事が地元出身なので土産を買うならと一色町の「一色魚ひろば」に案内してくれたので、名産の海老せんべいを二種類購入、そう言えばせんべいを個人の店で製造販売しているところをちよくちよく見かけました。

三河安城駅で一年後の再会を期して握手しました。

良本在慶君を偲んで

豊田 徳司（大17回）

今月（十一月）八日に良本君の突然の訃報に接し本当に驚き、寂しい思いをしました。

滋賀大四十四年卒同級の柴原良昭君（日本生命）から追悼文の依頼を受け、良本君のことを振り返りつたない文ですが思い

出しながらつづります。私たちの出会いは昭和四十年春、彦根城の内堀にある体育館でした。

昭和四十四年卒業まで卓球部に所属し彼は後キャプテンとなり練習では私をしょいでくれました。いつも笑顔でみんなをまとめ何かにつけて世話を焼いてくれました。

卒業後は良本君は東京日本橋の京樽に就職し、私は三重県と離れ離れになり再会が私が東京勤務となった昭和六十年代の時で場所は東京陵水会の会場ででした。そこでは彼の職場の皆さんや在京の大先輩の方々を紹介して頂き、その後も時々同窓会に参加しています。

良本君は京樽で総務部長をしていた頃、会社の経営状態が厳しい時を迎え資本が変わり彼の職場も慣れない営業分野となり最後まで顧客獲得の外交を担当していました。弊社へも弁当やおせち料理の注文をとりに来てくれたことを今では懐かしく思い出しています。また九十五年の神戸大震災では故郷のことで大変だったことも思い出しています。決して平坦な人生ではなかったと思いますが、生来のポジティブな性格と明るさで、い

つも我々の集まりや飲み会等の世話役をしてくれていました。そんな時帰りが遅くなつて私の狭い社宅に泊まって私の家内に学生時代のクラブや授業でのサボリ癖等話され困ったことなど今では文句も言えなくなつてしまいました。彼は家族思いでお子さんが国体で卓球選手となり好成績であったことをはにかみながら自慢していました。

また最近では平成十七年五月の陵水会東京支部の幹事を我々獅子の会（44年卒）が務めトヨタフイナンシャルサービスの尾崎社長を招いて（柘君デンソーエース社長の手配）講演を頂き盛大に開催したこと等、いつも良本君が賑やかに話してくれて「聞き上手」で自然体のまま一緒にいると心地よい安らぎを感じさせるものがありました。

我々友人達も、君を失った今はポツカリと空洞ができてしまったという淋しさを禁じえませんが、良本君さようなら、安らかに眠りください。 合掌

平成十八年度有田会開催

吉田 勇夫（大15回）

十一月十八日（土）、十九日

（日）、久し振りに彦根で平成十八年度有田会が開かれた。今年の世話人は滋賀県在住の津田隆氏（大12回）、会場は百年の歴史のある料亭「伊勢幾」で、十八日（土）午後六時より講演を加藤友明氏（大11回）にてスタートした。それに先立って、宿泊組は原綱宗氏（大14回）のご照会で米原琵琶湖畔のホテル「エクシブ琵琶湖」に午後四時、十八名が集合、ホテルのバスで「伊勢幾」へ移動。参加者は全員で二十二名。

講演は先ず有田会の歩みを、第一回の一九六二年（昭和三十一年）から今回の四十六回までを資料写真を添えて発表された。要旨は以下の通り。

「有田会は一九六二年杳名敏郎氏（大6回）が発起人となりスタート、その時に未だ学生だった加藤友明氏が参加を要請され、今回の四十六回まで皆勤をされているとの事。初回から講演が開催され、有田先生担当の経済学に関するレポートが二十五回頃までは続いて、最近では会員の活動や趣味の話になってきている。二〇〇四年に有田先生が逝去された後も、先生を偲んで毎年開かれている。二〇〇五年には有田先生の蒐集されていた郷



土玩具を保存展示してある愛知県豊田市民芸館の見学をした。」
 続いて「海外旅行の泊り方、乗り方、歩き方」の話があり、加藤友明氏の一九八四年から二〇〇六年までの海外旅行二十六回の遍歴を資料、ポスターを交えて紹介。泊り方としては週単位の貸しアパート、乗り方としては交通費、宿泊費、食事代オイル込みのリゾート滞在などこれから海外旅行を検討されている方にも興味深い提案だった。

懇親会に入り杓名会長の乾杯の後、学生時代、近況報告とお互いの話が続き、宴たけなわのうちに午後十時に閉会。なお、次回は八年振りに京都で開催して欲しいとの声が多く、〇七年

六月九日～十日に原綱宗氏の世話人で実施する予定。その後、宿泊組はホテル「エクシブ琵琶湖」に戻り、夜の更けるまで尽きることなく語り明かしたが、翌十九日は皆さん元気に午前九時に集合、来年の再会を期して解散した。

東京陵水会囲碁会便り

〇十一月十八日(土)十時三十分より、今年度第二回東京陵水会囲碁大会を、全国情報サービス産業厚生年金基金会館で開催しました。今回は、常連の棋士が数名止むを得ず欠席され、やや寂しい大会となりましたが、それでも十五名の棋士が熱戦を繰り広げ、大会後は、表彰式に引き続き懇親会に移り、楽しい一時を過ごし散会しました。熱戦の結果は次の通りです。

優勝 吉原 悟一 四段(大9)
二位 北村平太郎 七段(大5)
三位 細井 恭一 初段(大5)
 次回は二〇〇七年六月を予定しています。新規参加希望者は次へご連絡ください。
 幹事：三井・電話：〇四五―九四一―一七六一
 幹事：畠山・電話：〇三一―三八

四八―二三一二 (三井照次記)
 〇陵水会三支部(大阪 名古屋 東京)囲碁交流会が十一月二十六日(日)～二十七日(月)、熱海ニューフジヤホテルで開催。この大会は年一回各支部が順番に幹事となり、今年で四回目。今回は東京支部が幹事でした。参加者は二十三名(大阪七名、名古屋七名、東京九名)、いずれも「狂」のつく基好きばかりです。初日は熱戦の後露天風呂の温泉と飲み放題の宴会を楽しみ、その後も深夜まで対戦やら勉強(?)会で楽しみました。二日間五局づつの熱戦の結果。
A組(六段以上)
優勝 鷲見公嗣(大10)、二位 篠田 豊(大11)、三位 天田 志郎(大5)、四位 深尾忠義(大7)、五位 北村平太郎(大5)、**BB** 木船一男(大12)。
B組(5段以下)
優勝 細井専司(大9)、二位 松田俊一(大6)、三位 吉田 勇雄(大4)、四位 吉原悟一(大9)、五位 田中秀和(大10)、**BB** 細井恭一(大5)。(畠山義生記)



第六十七回東京陵水ゴルフ会
 平成十八年九月十九日(火)
 金乃台カントリークラブ

晴・無風、チョッピリ汗ばむ程度の絶好のゴルフ日和に恵まれ、三十三名九組で、熱戦が繰り広げられた。

大9回卒の坂田さんが、二位に六打差のフツチギリ優勝！二位から八位まで二打差という接戦の中、大7回の浦谷さんが準優勝、三位には年齢差で大10回の佐藤さんが入賞。大10回の三井さんが86(41/45)でベスグロ獲得、宇治原支部長が十打縮め大波賞獲得。

宇治原支部長の乾杯の発生で始まったパーティーは、いつもの如くビール・ワイン・日本酒とメートルが上がるに従って、学生時代の話やゴルフ談義などに花が咲き、高商校歌斉唱でやっとお開き。十七時五十分の貸しきり臨時クラブバスで全員帰路についた。

成績

優勝 坂田 忠彦(大9) 67(22)
準優勝 浦谷 政夫(大7) 73(23)

三位 佐藤 秀孝(大10) 74(16)
 四位 中村 弘(大14) 74(19)
 五位 加藤 博善(大14) 74(18)
 七位 畠山 義生(大10) 75(13)
 十位 三宅 義男(大6) 78(19)
 十五位 臼井 和宣(大14) 81(22)
 二十位 宇治原嘉政(大7) 85(19)
 二十五位 柴田茂夫(大2) 88(13)
BB賞 田村 寿夫(大12) 92(19)
ベスグロ 三井(大5) 86
ニアピン 黒沢(大2)・西澤・山本(孝之)・松浦・加藤
大波賞 宇治原10
水平賞 畠山 (山本 保記)



第六十八回東京陵水ゴルフ会
 平成十八年十二月十三日(水)
 金乃台カントリークラブ

平成二年三月十三日、赤羽ゴルフクラブでの第一回以来、欠かさず年四回のゴルフ会は十七年六十八回となり、当初十二名、第九回磯子カントリークラブで二十名の参加、第十七回に楠田

先輩（本24回）が当時社長をさ
れていた金乃台カントリークラ
ブで初めて開催以来、エコノミ

成績

一な会費と飲み放題のもてなし
に二十一回以来十年余定着。

今回その第一回から参加の中
辻大先輩が十八、十九回以来め
でたく復活優勝！ちなみに十八
回はハンディ二十五でネット七

十の優勝。本稿筆者の箸方が当
日十六番ホール百八十五ヤード
でホールインワン！ハンディ四
でネット七十二の三位、グロス

七十六の快挙で昔日の感です。

参加者の三十名台乗せは第三
十六回の三十二名、今回当初申
込は四十二名、十一組の記録更

新かと思われましたが、四名の
キャンセルで四十名の大台乗せ
は来年に持ち越し。今回も初参

加の三名が、実質ベスト四と若
さ？の力を見せました。うち滋
野君はヨット部全盛のインカレ

総合準優勝の昭和四十年のメン
バーで、主将の加藤君（今回二十
位）とともに作った応援エール

七—三三七—四七八〇）大15回
山本保氏までお電話下さい。

優勝	中辻 喜蔵	本21	70	(36)
準優勝	滋野 輝彦 <th>大17</th> <th>67</th> <th>(15)</th>	大17	67	(15)
三位	日高 信次 <th>(短)</th> <th>70</th> <th>(15)</th>	(短)	70	(15)
四位	金井 肇 <th>大14</th> <th>72</th> <th>(10)</th>	大14	72	(10)
五位	山本 孝之 <th>大9</th> <th>73</th> <th>(16)</th>	大9	73	(16)

八位 木戸 彪 大16 75 (16)
十位 中村 弘 大14 76 (19)
十五位 山本 保 大15 80 (23)
二十位 加藤 博善 大14 82 (18)
二十五位 山口昭夫 本22 83 (36)
三十位 宇治原嘉政 大7 85 (19)
BB賞 浦谷 政夫 大7 97 (18)
ベストグロ 名口 大14 77

彦根コンフィデンスヤル

——滋大陵水新聞会

一昨年度陵水会が主催する学
生向けのイベントはいくつかあ
った。例えばジュニア陵水懇話

会とリーダーシップ論である。
ジュニア陵水懇話会は主に一、
二回生を中心とした懇話会であ

る。リーダーシップ論は、昨年度
全七回にわたり五人のOBの方
々によって行われた全学生を対

象とした講義で、今年度の秋学
期も開講されているものである。

一昨年度のジュニア陵水懇話
会では、公認会計士の松澤進さ
んと国土交通省勤務の大原孝明

るものである。しかし昨年の
参加者数は非常に少なく、決し
て効果的ではない結果に終わった。

原因として考えられるのは、
開催の時間と宣伝の不足である。
一昨年の開催日は六月十六日

（木）の十四時三十分からであ
ったが、この時間は当時の二回
生が多く履修する講義が通常通

り行われていたため、参加しよ
うと思っても出られないという
状況に陥っていたと考えられる。

それなりの措置が採られなかつ
たことは問題視すべきであろう。

日時については教員、学生双方
の意見を聞き、最大限のパフォ
ーマンスを得られる時を選ぶこ
とが望ましい。

ニアピン 金井・中村・名口・
岡田（大2）・中村奎吾（大13）・
吉原（大9）・松浦（大8）
大波賞 川本（大1）
水平賞 金井
尚、初参加は滋野、日高、金
井の三氏 参加者三十八名
（著方海三 記）

講義は新たな試みであったが、
リーダーとはどうあるべきか、
学生生活をどのように過ごすべ
きかという主題のもと、参加し
てくださったOBの方々の経験

談を交えた話は学生に好評だっ
た。OBの方が語る学生時代の
エピソードなどは、学生に親近

感を抱かせるものであった。同
時に企業での話は、将来に対す
る具体的なビジョンを提示し、
学生自身が考えることを促した。

だがこの講義の問題点は、O
Bの話のうまさによって講義の
質が変わってしまうということ

だ。講義の面白さが人によって
変化するので、講師に誰を選ぶ
かの際に話術を見極める必要性

が感じられた。そしてもう一つ
学生が興味を持つ点として、来
ユーが挙げられる。ネームバリ

ユーが無くて話が面白い人は
いる。しかし人を寄せるといふ
意味では、「企業名」や「肩書き」

はある程度は必要だ。今年度の
春学期には、京都銀行頭取の柏

原さんが「滋賀大学で学ぶ」と
いう講義に招かれた。その際は
講義を一般開放し、学生以外も

聴講できるようにした結果、い
つも以上に多くの人が講義に参
加することとなった。そういつ

た一般開放も含め、開催する講義の規模を大きくしても十分に意義はあると思われる。

滋賀大学という教育現場において、陵水会にしかできないことは多々ある。しかし学生にとってOBは遠い存在で、なかなか親しみをもちにくいイメージがあるうえ、接する機会自体も少ない。そのためジュニア陵水懇話会やリーダーシップ論はそういったイメージを崩す良い機会でもあるのだ。

東京陵水豆事典

米国年金もらえます

駐在経験者はチェックを

陵水会員の中には企業戦士として過去、米国で駐在、勤務された方々もおられることと思います。二〇〇五年十月一日より、日米社会保障協定が発効され、年金(SOCIAL SECURITY)が、掛け捨てになっていたものが、老齢年金として日本にいても受け取れるようになりました。(本来の協定は社会保険料の二重払い防止が目的ですが)。資格条件は(1)米国年金制度の加入期間が一年六カ月以上あること(2)日米双方で年金制度の加入期間が十年以上あることです。米国駐在経験のある方は殆

どこの条件を満たしていると思われます。この受給申請は日本の社会保険事務所や年金相談センターの窓口で行うことが出来ます。必要書類は、戸籍謄本(扶養家族がいる場合)、パスポートのコピー、日本の年金手帳又は年金証書の写し、米国 SOCIAL SECURITY CARDのコピーです。申請書は日本の社会保険事務所に備えてあります。

申請受付は該当年齢に達する三カ月前からですが、申請手続きが受給権発生から六カ月以上経過した場合、時効が適用され、請求申請書提出日から六カ月前の年金までしか認められませんのでご注意ください。

米国駐在経験をお持ちの方は、申請なさってはいかがでしょうか。詳しくは最寄の社会保険事務所にお尋ねください。

加藤博善 羽瀨展世(大14)、海老洋(大15)、佐藤充宏 渡辺雅利(大16)、柘治三 中根昌孝(大17)、岡田憲治 岡本文夫 徳山秀雄 中村嘉秀 村瀬尚文(大18)、西澤弘行 竹森二郎 浜 筆治(大19)、大八木勉 田中二郎 上田 求(大20)、縣 忍 北野敏彦 能 島伸夫(大22)、足立浩次(大27)、板根 徹(大29)、磯野和也(大30)、黒岩征一郎(大31)、廣田真哉(大32)、石田雅之(大33)、島津泰幸(大34)、能 登英彦(大35)、大塚正人(大37)、大原孝明 北川昌樹(大38)、上田 修 高木教行(大42)、中島幸一郎(大51)、松江 大輔(大53)

前号記載者を除く

松居敏郎 山上敏夫(本11)、沼尻恒雄(本14)、丁野純一(本15)、若林定男(本18)、山 成軒六(本20)、大塚昌一 樋 口廣太郎 吉村行雄(本21)、関本晃三 寺本康郎 藤見 隆(本22)、山田昌雄(本23)、岡 田 浩(本24)、我孫子孝 乾 哲彦 澤井良治 宮崎 正(大2)、畑 宗明 用田政一 吉 村 恒(大3)、新道隆弥(大4)、大谷毅丈夫 高橋秀治 橋本長夫 児島正次(大6)、伊藤芳朗 木下実 東野和弘(大7)、大島明美(大8)、西 坂徹雄(大9)、小西捷治 中 沢龍彦(大10)、野一色公平 松浦紀久雄(大11)、小原捷治 宮野幸男(大12)、石田昭郎

※前号掲載氏名訂正
堀井幸夫氏を堀川幸夫氏に、
内山晃廣氏を内川晃廣氏に訂正。

※年次別納入者数(上位年次)

① 大4回 二十一名
② 大10回 十七名
③ 大6回 十六名
④ 大2回 十四名
⑤ 大7回 十四名

謹賀新年

株式会社トッパンNEC

サーキットソリューションズ

代表取締役社長 田川 行雄 (大9回卒)

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-2-7 ☎03-3276-8181



株式会社 金乃台カントリークラブ

代表取締役社長 石坂 信行

〒300-1211 茨城県牛久市柏田町3432

TEL 029-872-0182 FAX 029-872-3182

『今年も皆様のご来場をお待ちしております』

琵琶湖夢街道

第19回 大近江展

会期：平成19年1月25日(木)～30日(火)
10時～20時(最終日は18時まで)

会場：日本橋高島屋8階催会場・ギャラリー会場

【主催】樹びわこビジュアルズビューロー【後援】滋賀県【協賛】樹東京滋賀県人会・全国滋賀県人会連合会



彦根城
築城四百年

編集室 所感

国立大学法人滋賀大学は、間もなく三年目に入ります。制度発進から六年間の中期目標推進期間の中間を迎える年でもあります。大学法人経営の衝に直接当られる先生方も一段とご苦労が多くなることと思います。この期に臨んで陵水会もその存在意義をしっかりと確認しておくことは、母校の将来にとり極めて大切です。当支部幹部の諸氏によりこれをテーマに要点を語って頂きました。

四十代で大企業の取締役に就任と、朝日新聞の人物コラムにも登場したCSKホールディング取締役会議長の青園雅紘氏をお訪ねし、陵水人の意気をご披露いただきました。

「東京陵水」の編集スタッフを更に強固とし、息の長い発行体制を構築していこうと、努力しております。幸いにして大学十五回の奥村勇雄、海野広司の両氏に今号から参画してもらいました。本紙は陵水会員のネットを繋ぐ役割を担っています。発行編集作業への自主的なご参加を切望しています。

(H)

発行所

〒236-0004

横浜市金沢区福浦1-14-9

守谷輸送機工業(株)内

陵水会東京支部 支部長 宇治原嘉政

電話 045 (785) 3716

印刷所

〒110-0015

東京都台東区東上野1-28-3

船舶印刷(株)

電話 03 (3831) 4181

「会報」原稿・情報のご送付先

林 史欣 (大8回)

〒164-0014

中野区南台2-15-10

(TEL・FAXとも)

〇三―三三八―四四三一

※編集室のメールアドレスは

hysckys@yahoo.co.jp

(次号分より切日五月末日)

陵水会東京支部

ホームページアドレス

<http://www2.ocn.ne.jp/~ryousuit/>